

歯と口の保健と子どもの成長

高木裕三 (東京医科歯科大学大学院教授)

子どもは誕生後、形態的な成長と機能的な発達によって新生児期から乳児期、幼児期、学童期、思春期へと発育していきます。この時、身体のすべての組織・器官は互いに影響しながら調和のとれた成熟へと向かっています。口腔領域の組織・器官も例外ではなく、それらは全身と密接に関係しながら発育します。特に、新生児期から乳児期、幼児期にかけて歯と口は、全身の発育・保健に大変大きな関わりを持っていますが、一般にはあまり注目されていません。

母体から独立した子どもは、直ちに自らの口を通して栄養摂取を行います。すなわち、身体の発育と保健に最も基本的な機能である吸啜（後に咀嚼）を営みます。また、周囲の情報を五感（視覚と聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を駆使して集めますが、特に乳児期中期から1歳半くらいまでは、あらゆる物体を口に持っていく、口唇と舌でそれらの認知と識別、学習を行います。この時期は、心理学で口唇期と呼ばれるものに相当しますが、口唇で快感を感受する時期と考えられており、これが後に散見される吸指癖の情緒安定機能に繋がっていることを想像させます。

また、1歳を過ぎると子どもは意志疎通の手段として言葉を学習していきますが、歯と口は構音器官としてその発達に極めて大きな役割をはたします。さらに、顔は思春期頃までの長い時間をかけて成長し、その審美性が人の自信や幸福感を左右します。歯・歯列・顎

は顔の重要な部分を占めているので、それらの保健が顔の成長と外見に大きく影響します。以上のような歯と口の機能や形態が、結果として子どもの精神発達や心の保健にも大きな関わりを持つ事になります。

このように、子どもの歯と口は全身の発育と保健に重要な関わりを持っており、それらの障害は子どもの発育に様々な影響を及ぼします。一方、子どもの歯と口の疾患を見ると、う蝕や歯周病、口腔習癖などの成り立ちには口腔領域の条件だけでなく、子どもの生活環境や生活習慣が大きく関わっています。したがって、子どもの生活全体に領域を広げて対応しないと、これらの疾患の予防は困難であることを小児歯科医は感じています。

本講演ではこういった観点で歯と口の機能を概観するとともに、口腔保健の実効性を高めるためには子どもの教育や心理、保健、福祉に関わる多くの職種との連携・ネットワーク構築が不可欠である事をお伝えしたいと思います。

プロフィール

東京医科歯科大学大学院 歯医学総合研究科小児歯科学分野教授。東京医科歯科大学歯学部附属口腔保健教育研究センター長、日本小児歯科学会常務理事、日本外傷歯学会副会長、小児科と小児歯科の保健検討委員会副代表。昭和53年、東京医科歯科大学大学院修了（小児歯科学専攻）、歯学博士。東京医科歯科大学歯学部助手、米国ノースウェスタン大学歯学部客員講師などを経て現職。

ランチオンセミナー

効果的な口腔衛生指導

井上雄温 (日本小児歯科学会関東地方会会長)

歯科疾患の予防に、口腔内の清掃は大変重要です。しかし、小学校に入る頃までは小児だけではしっかりと清掃することができません。そこで保護者や育児担当者が歯磨きを指導し、さらに仕上げ磨きをしながら、「食べた後磨く」という習慣となるような指導が必要となります。

最初は食べた後歯ブラシを口に入れることから始め、きれいにすることや、きれいにしていることが気持ち良いと感じてもらえるようにすることから始めましょう。楽しく歯磨きをするために歌を歌ったり歯ブラシの動きの回数を数えたりする方法もありますが、家族やまわりの人が一緒に歯磨きをするのが一番よい方法です。

今回のランチオンセミナーでは、実際に歯科医院で行われている口腔衛生指導をご紹介します。歯ブラシやデンタルフロスなどの清掃道具の選び方や使用方法についても説明しました。また、成長発達に伴って変化する小児の口腔内の状態の変化をお見せし、その時期に応じた口腔内清掃のポイントをご紹介します。